

——次に広がっていた景色は、先ほどの花弁が舞う場所と変わって、芝生迷路のようだった。こはねは帽子に収めた花びらが無くなっていないかと確かめる。よかった、消えていない。安堵した矢先に、この場所がなんなのか考えてみる。

「ここもセカイ……なのかな？」

「たぶん……まだ元の場所じゃなさそうだな」

あたりを見回すと、先ほどの花びらが目印のように落ちていた。冬弥は恐る恐る近づくが、何も起きない。危険はなさそうなのでこはねを連れて、目印の花びらを辿っていく。

芝生迷路を抜けると、レンガ造りの町があった。夕暮れに染まった、少し寂しさを感じる景色。そこに人の気配は感じられなかった。

「ちょっとだけ、怖いね……」

不安げになったこはねが、冬弥の服の裾をつまむ。それに気づいた冬弥は、こはねを安心させるためにそ

の手を包んだ。

「大丈夫だ小豆沢、離れたりしない」

「青柳くん……ありがとう」

微笑んで見せると、こはねも笑みをこぼし手を握り返してくれた。

町の中にあるガス灯が灯っており、そのもとに電車が停まっていた。駅に入って電車に休憩がてら座り込む。

「この場所がセカイなら、誰の想いでできているんだろうな」

「そうだね……でも、さっきのお花の場所もこの町も、素敵な想いが詰まってる気がする。最初はちょっと怖かったけど、優しい雰囲気があるんだ」

「優しい雰囲気……」

こはねは帽子に詰まった花びらを掬い上げる。夕陽に赤く染められた花びらを、こはねは愛おしそうに撫

でた。

「このお花、このまま持ち帰れそう。押し花にして飾りたいな」

「それなら、俺も少しもらっていいか？」

「もちろんいいよ。そうだ、栞にして贈ってもいい？」

「ああ、とても嬉しい」

弾む会話のあと、こはねはふと口にする。

「青柳くん、少し歌ってもいい？」

構わない、と冬弥は返して、こはねは息を吸う。そ

して、ゆったりとしたバラードを歌い上げた。

普段やるイベントでは全く歌わない曲。こんな顔を
して歌うのか、と冬弥は歌うこはねにしばらく見惚れ
ていた。

こはねが一曲歌い上げると、急に電車が動き出す。

彼女が転ばぬように、冬弥はバランスを崩したこはね
を受け止める。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう、青柳くん」

電車が動いた先、暗いトンネルを抜ける。これから、
どこに向かうのかな。こはねが考えているうちに、小
さな劇場にたどり着いた。

「この場所は……」

冬弥が小さくこぼした言葉に、こはねは顔を上げる。

「青柳くん、もしかしてこの場所知ってるの？」

「……いや、俺が前に読んだ本の景色に似ているなど
思っ

「じゃあ、ここって青柳くんの思いからできてるのか
な？」

「でも、先ほどの町や花畑は覚えがないんだ。小豆沢
は心当たりないか？」

「どうだろう。考え込んでみるが、さっぱりだ。一体
ここは、どういうセカイなのだろう。」

「……まず、この劇場を調べてみようか」

この提案に二人は頷き合って、劇場の中に入ってみることにした。

劇場の中は、少し古い、座席の後ろに映写機が置かれていた映画館だった。映写機は歯車を回して、二人が先ほど歩いた町の景色や、まだ知らない自然にあふれた綺麗な場所を映している。

「ここは……やはり、俺が読んだ本に出てきた場所みたいだ」

「そうなの？　どんなお話か、聞いてもいい？」

「ああ。主人公が亡くなった祖父からこの劇場を引き継いで、ここを思い出の場所になっている人たちから祖父の人物像を明らかにしていく……という話なんだ」

「面白そうだね！　今度借りてもいい？」

「……実は、ちょうど今読んでいる本がそれなんだ。よかったら、今度一緒に読むか？」

「うん！　最後はどうなるんだろう……楽しみだね！」
話に花を咲かせていると、ふと映写機が止まる。ど

うやら全てのフィルムを映し出したらしい。

「話は弾んだが、ここから出る方法は見つからなさそうだな……」

「一度、電車に戻ってみる？」

そうしよう、と冬弥は頷いて、二人は劇場を後にした。

電車に乗って一息つく。次の景色はどんなものになるだろう。最初に感じていた不安は消えて、わくわくとした気持ちであふれていた。きっとこんな気持ちになれるのは、隣にいる人のおかげなのだろう、とこはねと冬弥の気持ちが重なった。

電車はまだトンネルを通り、新たな景色を二人に見せる。そこはネオンが光る街。先ほどまでと毛色の違う景色に、二人は驚く。

「なんだか、私たちのセカイに似てるね」

「ああ。もしかしたら元の場所に近づいてきているの

かもしれないな」

希望を持った二人は、電車を降りて、ネオン街へと繰り出す。

ビビッドストリートや、想いのセカイとはまた違った空気が、ここには流れていた。

「なにか、音楽が流れてる……？」

こはねの言葉に冬弥も耳を澄ませる。確かになにか、どこかでイベントをやっているのだろうか——音楽が聞こえる。

「この建物から聞こえてきているみたいだな。入ってみるか」

こはねはこくりと頷き、冬弥はドアに手をかけた。